

2015/10/1

しろひげ@Kurobane です。

10月になりました。

残暑がなかった代わりでもないでしょうが、天地と人事の異変に翻弄されながら、嫌な”暑さ”を残して新しい月を迎えました。

この常ならぬ”残暑のほてり”を新たな希望につながる燠火(おきび)にかえて、時代の監視を続けることにしましょう。

警戒すべきは、私たちの「内なる弱さ」であり、「無力感と諦め」という最も安易な道を選択せぬようにしなければなりません。

それにしても、思うに任せぬ人の世を尻目に天地のめぐりは律儀です。

澄んだ空を背景に、様々な花が織りなすこの時季の景色は、「花野」という言葉を秋の季語にした日本人のセンスの良さを再認識させます。

とはいえ、こうした季節への情趣は、古今東西同じです。

Autumn is a second spring when every leaf is flower.

秋は、全ての葉が花になる第二の春である。 —アルベール・カミュ—

秋に寄せたこの言葉は自然への素直な心があふれ、パリの街路樹を歩く思索する若い作家の姿を思い浮かばせてくれます。

<霜葉(そうよう)は二月の花よりも紅なり>は唐詩の名句です。

霜を経た紅葉は春の花より赤い、とは彼の国特有の詩的誇張ではありません。

むしろ雄大で祝祭のような秋の美しさを、わずかな字句で伝えてくれます。

春はただ花のひとつへに咲くばかりもののあわれは秋ぞまされり

『拾遺』のなかの、読人しらずは深まる秋で物思いにふけります。

庄内の人も、時にハリジェンヌに、時に唐の人になりながら、出羽山稜が紅葉で染まっていくさまを、楽しむことにします。

「もの思う秋」、「くさぐさの秋」は、今年も私を暇にしてくれません。

黒羽根整形外科  
黒羽根洋司